平成25年1月26日

組織的な若手研究者海外派遣事業　出張報告書

医学医療系臨床医学域腎臓内科学講師

臼井　丈一

派遣先：コーネル大学病理学教室（Department of Pathology, Weill Cornell Medical College, Cornell University, New York, NY）

期間：平成24年11月26日～平成25年1月26日

目的：腎臓病理学に関する研究

　今回，筑波大学医学医療系，組織的な若手研究者海外派遣事業により，コーネル大学病理学教室での腎臓病理実地研修および腎臓病理研究に参加した．その実務内容を以下に報告する．

○コーネル大学病理学教室（腎臓病理学グループ）での腎臓病理診断

　コーネル大学病理学教室は外科病理学が主体であり，腎臓病理学グループはminor pathologyとして独立している．今回の留学のMentorであるProfessor Surya V. Seshanは，糸球体疾患病理分類WHO classificationを作成したLegendary Jacob Churg（Mount Sinai Medical Center, NY）に師事し，腎臓病理診断の豊富な経験を有するとともに，数多くの学術論文の執筆，また，12年に渡る同大学での医学生，研修医教育等，大学教員として規範となる活動をしている．腎臓病理学グループは他attend一名と合わせ計二名の少人数グループであるが，当大学腎臓内科を含め，New York，New Jersey，Pennsylvaniaの3州，計10病院から，腎生検検体を受け付け，年間800例程度の腎臓病理診断を実施している全米でも有数の腎臓病理診断施設である．このような施設で現在および過去の腎臓病理検体を閲覧することで，これまでに経験したことがない数多くの貴重な症例を確認することができた．

○腎臓病理診断：米国と本邦との違い

経験した約150例の腎臓病理から分かる米国と本邦の腎臓病理像の違いを以下に列挙する．

・米国は腎移植大国であり，移植腎腎生検が大半を占めていた．本邦でも法律改正や今後の更なる啓発活動により腎移植件数の増加が予想されており，移植腎病理を経験できたことは今後の腎臓臨床に役立つことが期待できる．

・米国はHIV感染者が多く，HIV感染関連腎障害が数多く含まれていた．HIV自体による腎障害以外に抗ウイルス薬による腎障害や他の感染症関連腎障害を併発している症例が多く，多様な病理像を呈することを確認した．

・健診受診率の高率な本邦では軽症な糸球体腎炎が腎生検の大半を占めるが，米国では軽症な糸球体腎炎は低頻度であり，健診未受診者が相当数存在することが推察された．

また，世界都市であるNYの有数大学と本邦の一国立大学との間で，腎生検検体作成の技術や腎臓病理診断手法に大きな違いはないことを確認できたことは重要なことである．

○腎臓内科，移植内科，膠原病内科とのカンファレンスへの参加

他病院での開催を含め，週に1～2回の腎臓内科を含む臨床診療グループとの合同カンファレンスに参加する機会を得た．中でも，コーネル大学腎臓内科，膠原病内科，腎臓病理グループで合同主催するLupus nephritis fellowship programは秀逸な教育カンファレンスであり，今後，筑波大学でも同様の取り組みの再現を思案してみたい．

○症例集積研究：ある薬剤性腎障害の臨床病理学的研究

　近接するコーネル大学関連病院であるMemorial Sloan-Kettering Cancer Center, Dr. Glezerman，New JerseyにあるSt. Joseph’s Regional Medical Center, Dr. Chandranの協力により，ある薬剤性腎障害5症例の臨床病理学的解析を行い，特にその病理所見にスペクトラムがあることを明らかにした（論文作成中であり薬剤名を含む詳細は割愛）．今後，本年度のアメリカ腎臓学会Renal Week 2013での学会発表，論文投稿を予定している．

最後に，このような貴重な機会を得るに際し，組織的な若手研究者海外派遣事業関連教員，医学支援室研究支援，Medical English Communications Center，腎臓内科学山縣邦弘教授，腎・血管病理学長田道夫教授に深謝いたします．